

パネル発表「神戸市における学校飼育動物訪問指導モデル事業について」

針間矢保治 物延 了

1 経緯

<学校側>

飼育担当の教諭に動物飼育に関する知識がなく、動物の傷病等について相談するところもないので、獣医師への相談体制があれば非常に助かる。

<獣医師会>

個々の獣医師が診療の傍ら、傷病の治療や不妊手術等をおこなっていたが、学校の飼育状況の改善には繋がらなかった。獣医師会として動物飼育に関する指導相談に取り組まなければと考えている。

<神戸市保健福祉局生活衛生課>

動物愛護の普及啓発を小学校の児童にも広げ啓蒙していきたいと考え、従来から獣医師会への委託事業として実施している、一般市民への健康・飼育相談の一環として、学校への訪問をモデル的に実施することを考えている。

平成13年度に打ち合わせ会議が行われ、学校飼育動物訪問指導モデル事業が開始された。

平成14年度からは、教諭に向けての学校飼育動物担当者研修会が毎年開催されるようになった。



2 モデル事業実施方法

- ①モデル校5校を選定（小学校教育研究会理科部長が推薦し、教育委員会が決定）
- ②各校に担当する獣医師を3名決定する。
- ③事前訪問で、小学校の意向を考慮した実施方法を決め、飼育状況の視察をしておく。
- ④年2回の学校訪問指導を実施。（必要ならば去勢手術をおこなう）
- ⑤実施結果報告ならびに次年度のモデル事業についての説明会をおこなう。

<ふれあい教室を中心とした学校飼育動物訪問指導>

- ①講義：主にウサギについての基礎知識、飼育方法、接し方など、獣医師会が作成したスライドを基本に、各担当獣医師がその学校や学年に即した、オリジナリティあふれる講義を行っている。
- ②実習：だっこの仕方、体の観察、聴診器を使用して心音の聞き比べなどを行っている。

3 学校飼育動物担当者研修会

- ①講義：モデル事業について 動物介在教育
ウサギについての基礎知識、飼育方法、雌雄鑑別 高病原性鳥インフルエンザについての基礎知識と感染防御等
- ② 実習：教諭の質問を受けながら、ウサギの抱き方、雌雄鑑別など行っている。

4 訪問指導を行なった後のモデル校のアンケート結果

- 飼育舎の環境改善
- 飼育管理の改善
- 動物の基礎知識向上



- 動物を飼育する意義への理解
 - 子供たちの動物に対する思いやりや接し方の変化
 - 生命の大切さを実感できたこと
 - 飼育委員会から全校児童への拡がり（動物に対する意識）など
- ほとんどの学校から1年限りでなく継続したふれあい教室、訪問指導を行なってもらいたいとの要望が出されている。



5 モデル事業の現状と問題点

平成13年から今年で7年目になり、上記のア

ンケート結果からもわかるようにある一定の成果はあがっているが、問題点も見えてきた。

<学校側の問題>

- ・モデル校として指導して成果が現れても、担当教諭の転勤で元の状態へ戻ってしまう。
- ・教諭の知識を向上させるべく研修会をするも十分ではない。
- ・飼育状況に問題があっても、学校全体の問題と捉えていない場合が多い。
- ・事業の認知度が低い。

<行政側の問題>

- ・事業の主体が教育委員会ではないこと。
- ・本事業費が予算化されない。現状では動物愛護協会と獣医師会からの予算で運用されている。

<獣医師会の問題>

- ・担当獣医師の人材不足

6 おわりに

学校での動物の適正飼育の必要性と動物飼育を通して心を育てる重要性を教育関係者に認識していただけるよう、飼育マニュアルの配布や、研修会の機会を増やすことなどが必要であると考えている。また教育行政に現状を認識していただくため、獣医師会会員が行っている活動内容や状況を詳細に報告していくことが必要であると考えている。

最後に今後の事業の推進には、教育行政と獣医師会とが連携し学校と地域が一体となることが重要であり、本事業が子供たちのために発展していくことを望んでいる。

((社)神戸市獣医師会)

